「生きるとは個人がしている仕事ではなく、個人以上のものの仕事です。私が命を生きているのではなく、命が私を生きているというのが正確な表現です。私たちが弥陀の本願力にまかせてお浄土へ参らせていただくということは、命が命それ自身に還っていくこと、本当の命になっていくということです」　大峯顕先生『召喚する真理』より抜粋

「神さまと仏さま」

神さまと仏さまとはまったく性質の異なるものですが、案外区別がついていないものです。

おおまかに言って、神さまは人間が造り出したものです。仏さまは人間を超えています。

神社にお参りして、家内安全とか無病息災をお願いするのは、人間から神さまへ向かってのお願いです。自分を中心にした不浄なお願いです。お寺に参っても同じように仏さまにお願いするとしたら、それはたいへんな間違いです。

仏さまは人間のお願いをきいてくださる相手ではありません。仏さまは反対に、私たちに向けて願ってくださっておるのです。仏さまは私たち人間になにを願って下さっているのでしょうか？　自分が願う願いは教えてもらわなくてもわかりますが、仏さまの願いは教えて頂かなくては分かりません。ですからお寺で聞法することが肝要なのです。仏さまは私たちすべての人間が救われることを願って下さっています。しかし悲しいかな、その仏さまの願いに気づこうとしないのが人間であります。本能的に反逆しています。聞法は、まず仏さまに反逆している自分の姿を教えますから、我々には耳の痛い話しですし、なかなか足が向きません。仏さまと聞くと、本能的に逃げるようになっています。死ぬまでそっぽを向いたままのひともおります。最近、特にそういう人が多くなったというわけでなく、昔から人間は仏さまに反抗的なのです。年老いて死が近づき「しまった」と慌てたときは手遅れ、地獄へ真っ逆さま。いえいえ、そんなことはありません。仏さまはそんな人間のことをよくご承知です。「なむあみだぶつ」の一言で救ってくださいます。　南無阿弥陀仏は仏さまの「かならず救う」と、凡夫の「ありがとうございます」がひとつになったお言葉、何もかも整ったありがたいお言葉ですからお浄土へと生まれさせてくださいます。仏さまは、私たち人間に「南無阿弥陀仏」と申してお浄土へ生まれておくれと願って下さっています。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　法喜

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　

*今なら間にあう*

*終列車！*